

松陰における太平天国認識とその政治思想の転換

郭 連 友

アヘン戦争の刺激によって形成された松陰の兵学観・民政観は「ペリー来航」の時点（嘉永六（一八五三）年）にいたって「民政・海防」というスローガンに結晶された。この「民政・海防」の対策は「ペリー来航」の嘉永六年頃から安政元（一八五四）年末までに唱えられていたが、安政二年初頭から急激に変化が起きた。要するに松陰の「ペリー来航」の頃の「民政・海防」という「二元」的の海防論は安政二年初頭から、西洋近代軍事機器の導入による「海防」論を放棄し、「民政論」に収斂され、一元化されたということである。この間の思想的变化は松陰思想を理解する上で軽視できない重要な意味があるように思う。この変化はその直後の、彼の「民政論」のより一層の強調、「民

本主義」の始述者孟子への傾倒、『講孟劄記』の誕生およびその後の思想的展開・深化と密接に関わっているからである。

では、一体何がきっかけでこのような変化が起こったのか。従来の松陰研究では、松陰のこの間の思想的变化について、当時の彼の情勢判断、具体的にいうと、安政元年に幕府がアメリカ（「神奈川条約」三月、条約付録の「下田条約」五月、イギリス（「長崎条約」八月）、ロシア（「下田条約」十二月）との間に締結した和親条約など一連の外交的動きに対する分析、判断の結果——つまり、松陰から見れば、幕府の和親的態度は夷に屈服したことおよび攘夷の「機」を逃がしたことを意味した——によるものだとされている。要

するに、先行研究では当時国内の政治、幕府の外交姿勢が松陰の思想的転換に大きく作用したとみ、幕末の政治、外交等の動きとの関連から松陰のこの思想的転換をとらえている。従来の研究者のこのような指摘は松陰自身の「天下に機あり、務あり。機を知らざれば務を知ること能はず。時務を知らざるは俊傑に非ず。今已に天下の機を失ふ」〔獄舎問答〕安政二年四月六日。普及版『全集』二、二七〇頁〕という発言に即したもので、松陰の思想転換の一面を的確に捉えていることはいうまでもない。しかし、松陰の思想上のこのように急激な変化を理解するには、ただ単に幕末日本国内の状況が松陰の思想形成に果たした役割のみに着目するのでは不十分である。当時の国際状況、特に中国でのアヘン戦争に継ぐ大事件としての太平天国の乱が松陰のこの間の思想的転換に与えた影響を考える必要があるように思われる。

松陰と太平天国の乱との関係に関しては、従来、特に日本思想史研究もしくは松陰研究では残念ながらあまり重視されなかった。それが原因で、太平天国の乱が松陰の思想形成（転換）上においてもった意味がいまひとつ明らかでない。先行研究の不備を補うため、報告者は松陰の思想形成・展開に即しながら、彼がどんな時期にどのように太平天国に関心をもち、どのように研究し、どんなところに注

目したのか、またその後思想上どんな変化があったのか、などを検討し、それを通じて太平天国が松陰の思想的転換ないし思想形成にどんな意味があったかを究明することにした。

本報告では、幕末当時の政治・社会状況および松陰の思想状況などに即しながら、松陰が的確な太平天国の情報を載せた『満清紀事』（別名『南京紀事』、広東人羅森著。安政元年三月頃日本に伝えられ、安政二年春松陰によって『清国咸豊乱記』の題で翻訳される）入手以前に示した太平天国への強い関心、『満清紀事』の入手・翻訳・注釈、『清国咸豊乱記』のねらい、松陰の太平天国に対する認識など、特に太平天国研究によつて松陰の思想上に起きた変化や魏源の海防論の不徹底性に対して行つた批判等の事実に着目し、太平天国が松陰の思想形成及びその後の思想展開に持つ意味と果たした役割について究明した。

報告者は、安政二年時の松陰の「民政・海防」兼拳論から「民政・内治」優先論への思想的变化や魏源評価の変化が彼の太平天国への関心・注目・研究の所産であることを指摘し、更に松陰の太平天国への関心、研究及びそれを通じて得た思想上の成果とその後の松陰の思想的課題や思想の進路との関わりにも言及し、松陰の同時期及びその後の「民政論」の高唱、「民本思想」の祖述者孟子への傾倒、

『講孟簡記』の執筆、更に晩年の改革思想を示す「草莽崛起」論の提出などがいずれもこの期の太平天国への関心・研究・認識と深く関わっていることや、太平天国が松陰の思想形成及びその後の思想展開に重要な意味を持つものであることを指摘した。

(北京日本学研究中心 助教授)